

45 非甲状腺疾患における血清 T_3 ・ T_4 ・TSH値の臨床的検討

和田祐爾, 辻野大二郎, 高橋利明, 加藤義郎, 大原裕康, 星賢二, 染谷一彦(聖医大第3内科), 山下あけみ, 菊池いずみ, 岡田崇子, 板垣勝義(同放射線部核医学), 佐々木康人(東京大学放射線科)

対象は聖医大第3内科入院患者のうち、非甲状腺疾患患者1252名である。測定法は、 T_3 リアビーズ、 T_4 リアビーズスパック-S-TSHである。 T_3 ・ T_4 ・TSHの異常値を認めた症例は、304名(24.3%)であった。このうち T_3 が低値を示した症例は、224名(73.7%)であり、 T_4 が低値を示した症例は、40名(13.2%)であった。また T_3 、 T_4 ともに低値であった症例は、36名(11.8%)であった。

さらに症例数を増やし、疾患別に検討した結果も報告する。

46 急性心筋梗塞発症早期におけるTSH動態について

川原林千津子, 西村恒彦(国循セン放診部)
西大藤靖子, 土師一夫(同内科)

急性心筋梗塞(AMI)発症7日以内の神経内分泌的対応を、TSHの経時的変化から検討した。CCUに入院したAMI11例(平均63歳)を対象に、入院時より3時間、その後6時間毎にTSH、FT4、FT3、コルチゾール、およびミオシン軽鎖を測定した。全例にてTSHは入院時より低下し、6~60時間後に最低値を示した。その後TSHは上昇へ転じ、安定化するまでに30~63時間を要した。最低値と、上昇安定化した時点でのTSHとの差(Δ TSH)は1, 2~4, 3 μ U/mlであった。AMI発症早期のTSH動態の病態的意義について考察を加える予定である。

47 ^{201}Tl -chlorideによる上皮小体の転移および異所性上皮小体の検出

日下部きよ子, 金谷信一, 金谷和子, 中野敬子, 有竹澄江, 太田淑子, 丹下正一, 近藤千里, 牧正子, 重田帝子(東京女子医大放科), 小原孝男, 藤本吉秀(内分泌外科)

上皮小体癌の摘出後、血清 α フグムが高値を示し転移の疑われた5例に合計16回 ^{201}Tl -chlorideによる検索を行った。更に異所性上皮小体の疑われた1例に4回の α フグムによる経過観察を行い、 α フグムの有用性を評価した。これらの内7回はSPECTを加えた。局所再発および頸部リンパ節転移の3例および骨転移の2例は陽性像を呈した。縦隔のリンパ節転移および異所性上皮小体はSPECTのみで描出された。肺転移の3例はSPECTでも陽性像を呈する結節と集積の低い結節が混在した。 ^{201}Tl -chlorideによるSPECTは特に縦隔のリンパ節転移および異所性上皮小体の検出に有用であった。

48 MRIによる副甲状腺腫瘍の局在診断

日野恵, 池窪勝治, 伊藤秀臣, 山口晴司, 富永悦二, 川井順一, 才木康彦, 宇井一世, 中西昌子(神戸市立中央市民病院核医学科), 服部尚樹, 石原隆, 森寺邦三郎, 倉八博之(同内分泌内科), 中島秀行(同放射線科)

原発性副甲状腺機能亢進症10例においてMRIを施行し、他の画像診断との比較を行なった。症例は15~77歳、男性2例、女性8例であり、内科的に診断の確定したものに限定した。10例中、MRIでは6例、超音波検査、X線CTでは各々5例、シンチグラフィでは3例で腫瘍の描出が認められ、3例では、いずれの検査にても検出困難であった。1例では、MRIでのみ病変の局在診断が可能であった。6例とも腫瘍はT2強調画像にて高信号に描出され、周囲組織との識別が容易であり、MRIは副甲状腺腫瘍の局在診断に有用であると考えられた。

49 上皮小体機能亢進症における術前術後の骨シンチグラフィの検討

片桐誠, 吉川啓一, 原田種一(川崎医大内分泌・甲状腺外科) 大塚信昭, 福永仁夫(同核医学科)

上皮小体切除術が行われた上皮小体機能亢進症24例(原発性上皮小体機能亢進症(PHP)11例, 腎性上皮小体機能亢進症(RHP)13例)について、術前における骨シンチグラフィの特徴的所見と術後の経時的変化を検討した。

PHPでは、結石型においても骨シンチグラフィ上の異常所見が高率に認められ、頭蓋骨、脊椎骨および膝蓋骨への集積増加が特徴的であった。RHPでは、全身骨への集積増加が極めて高く、PHPに比べると下顎骨への集積増加が特徴的であった。PHPでは、術後、全身の集積異常が速やかに正常化したのに対して、RHPでは、正常化の遅延がみられた。膝蓋骨の集積増加は、本疾患に特徴的で、術後経過に関しても興味深い所見が認められた。

50 副腎腫瘍の局在診断における副腎シンチグラムの評価

古田希, 町田豊平, 大石幸彦, 赤阪雄一郎, 田代和也, 吉越富久夫, 浅野晃司(慈恵医大泌)

各種副腎腫瘍の局在診断における副腎シンチグラムの有用性を検討した。対象は術前の副腎シンチグラムを施行した副腎腫瘍61例で、原発性アルドステロン症(PA)31例、クッシング症候群(CS)11例、褐色細胞腫(PC)10例、その他9例であった。PAは副腎シンチグラムの局在診断率が71%で、CT(94%)、サンプリング(74%)につぐ3番目であったが、偽陽性例はなかった。CSは局在診断率91%と高率であった。PCは4例で ^{131}I -adosterolを、6例で ^{131}I -MIBGを用い、局在診断率90%と高率であった。その他の腫瘍では集積像の拡大ないし欠損で、腫瘍の局在を知り得た。副腎シンチグラムは非侵襲性の機能的検査法として、副腎腫瘍の局在診断に有用と考えられた。